

リレー 随 想

第2回

福岡いのちの電話後援会理事

川原 正孝

(株式会社ふくや 代表取締役)



父からの教え

私どもの会社「ふくや」は戦後父が創業した会社です。父は、戦前釜山で生まれ育ち、就職のため満州に移り、その後出兵した宮古島で終戦を迎えました。戦争体験を経て父は人生観が大きく変わり、これからの自分の人生は人の役に立たなければ申し訳ない、という気持ちが強かったようです。戦前は電力会社に勤めていたこともあって、戦後は九州電力さんへの就職の斡旋もあったようですが、「当時のサラリーマンだと時間と資金に制約があるから」と、自分次第で時間と資金のやりくりができる商売をしようと考え、創業したのが「ふくや」です。

もともと「ふくや」は食料品店からスタートしましたが、そのうち父は、他のお店にはない商品を取り扱おうと考え、子ども時代を過ごした釜山で慣れ親しんだ味の「明太子」をつくり店頭に並べました。昭和24年のことです。発売当初、明太子はあまりにも辛すぎて売れない日々が続きましたが、10年あまりかけて味の改良を重ねていきました。その傍らで、食料品店としての商売が軌道に乗り始めると、地域のことや学校のことなど周りからさまざまな相談を受けるようになり、そのうちPTAの行事や博多川の清掃、また、山

笠をはじめとした地域の祭りにも携わるようになりました。私はそんな父の姿を見ながら成長しました。

大学卒業後、地元の銀行に就職した私が「ふくや」に戻ったのは、父が亡くなる少し前です。「もともと、人の役に立ちたいという思いから『ふくや』を創業した、だから跡継ぎのことは今まで考えていなかったけれど、従業員やその家族、またお客様のために一代限りでやめるわけにはいかない、だから店を継いでほしい」という父の思いをこの時初めて聞きました。父が他界してから今年で36年が経ちますが、母、兄、私と二世代にわたり父からの教え、そして父の思いが詰まったバトンを受け継いでおります。

この「福岡いのちの電話」の活動について初めてお聞きしたのは、もうずいぶん前のことになります。初めてお話を聞きしたとき、真っ先に私の頭の中をよぎったのは父のことでした。もし父がこのお話を聞いたら、きっと喜んで協力するだろう、それならば私も父を見習い、できうる限りお手伝いさせていただこう、と思ったのです。

これからも、その当時の思いを忘れることなく、陰ながらご協力させていただければと思っています。

西日本新聞本社に〈新設！〉

2015年11月から、福岡いのちの電話を支援するための自販機が西日本新聞社内に設置されました。これは「自販機支援募金」として企業、団体などに協力をいただき、その販売収益の全額又は一部を募金としていただくものです。今回の設置で合計6台となりました。メーカーとも協議して設置の拡大に努めていますので、皆様のご協力をお願いします。詳しくは事務局までお問い合わせください。



上 福岡いのちの電話のメッセージが入っています。



右 設置されたコカ・コーラ自販機